

第1回清流ワークショップを開催して

建設省黒部工事事務所長 真下 和彦

清流の恵み

黒部川は、平成4年、5年、6年と3年連続で一級河川の清流ランキングNo.1となった。清らかな水が流れる黒部川に人々は親しみ、また、扇状地を流れる黒部川は伏流水の涵養源となって湧水を生み出し、この地域に多くの恵みをもたらしてきた。このような清流河川の傍らにいて、清流について、じっくりと考え直してみる必要があるのではないか、と考えるに至った。

いままでは、水質の悪い河川をなんとか改善して、水質を少しでも良くすることに努力を傾け、下水道や河川水の礫間接触酸化による浄化などの事業を行ったり、水質改善のための研究を進めたりしてきた。清流河川は、清浄な空気のようなもので、身近にあっても、つい、その存在を忘れてしまう。これからは豊かな未来を築くために、清流河川に注目していく必要がある。

清流河川と豊かにつきあっていくために

清流は良好な飲み水となり、また、地域産業への水供給源となる。また、イワナ、ヤマメやナガレトビケラなどの水生昆虫といった特徴的な生物が棲息し、豊かで清らかな流れとあいまって、地域の人々の精神形成にも影響を与えていると考えられる。このような清流河川について我々が知っていることは少ない。清流によって豊かな地域づくりを行うため、じっくりと研究を行っていく必要がある。

この研究は、行政担当者や学識者、民間活動家らとともに、さらに全国的な広がりを持って行ってこそ実のある成果が得られる。研究成果を発表し、全国に情報発信を行い全国の人たちと交流していく必要がある。

清流の研究は、体系的なものは未だ行われていない。どのような項目について研究すべきかについても、手さぐりの状態であったが、そのような中で活動の目標を持つために研究テーマの素案をまとめた。項目を以下に示す。

(1)清流河川の特徴

- ①清流の人間や諸環境に与える効果及び総合的水質評価法の研究
- ②清流河川の水質保全機構の研究

(2)清流と地域づくりの研究

- ①地域産業に与える効果の研究
- ②地域社会の精神形成に与える効果の研究
- ③清流による地域づくり手法の研究

清流ワークショップの開催

清流の研究を体系的に開始するにあたって、いままで、

個別に行われてきた研究を集めて今後の研究の方向を具体化していきたいと思い、行政担当者や学識経験者が集まって研究発表をするワークショップを催すことを企画した。研究発表の次に、発表者全員参加のパネルディスカッションを行い、討論の中から方向性を見つけていくこととした。また、ワークショップにより研究の輪を全国に広げ、さらに、行政マンや学識者、民間活動家など多くの人がいっしょに研究する体制を作っていきたいと考えた。

ワークショップの企画は、清流河川に恵まれた地域として北海道開発局、東北地方建設局、北陸地方建設局と建設省河川環境課、土木研究所河川環境研究室が中心となって行った。開催地は平成4年、5年と連続清流No.1（平成6年のランキングはワークショップ開催時は未発表）であった北陸の黒部川とした。6月28日(水)に黒部市のホテルロイヤルバリー黒部で開き、全国から行政担当者や民間の活動家など多くの人が参加された。予想を上回って300名の参加を得た。

実行委員長の荻野幸和黒部市長の挨拶で始まり、入江洋樹北陸地方建設局長、石川忠男建設省河川環境課長、中沖豊富山県知事の挨拶やスピーチが続いた。その後、富山和子氏による特別講演、研究発表、パネルディスカッションと続いた。

パネルディスカッションには、溪流河川札内川のほとりの高橋幹夫帯広市長、寒河江川から横山万蔵西川町長、また、地元黒部川で毎年行われている水のフェスティバルの企画の中心人物である中島松子氏が参加され、清流地域の地域づくりや活動の紹介をされた。

長時間のワークショップだったが、興味深い内容で、参加者は皆、注目して聴き入っていた。

以下にパネルディスカッションの主な発言を紹介する。

〔パートI 清流とは何か〕

吉田： 水の中の生物も親になり、川から出て、後にまた川に戻ってくるものがある。清流を、周辺も含めた自然の多様性の中でとらえたい。

盛下： 食物連鎖がしっかりしていることが清流の基本である。

石川： いままでは清流というものを主観でとらえてきた

島谷： 森を作り、また、下水道の整備をする、という努力の結果清流が作られている。

高倉： 黒部市は清流地域だから三次処理まで行っている



写真-1 挨拶する中沖豊富山県知事



写真-2 パネルディスカッション風景

清流ワークショップ プログラム

- 開 会 清流ワークショップ実行委員長・黒部市長／荻野幸和
北陸地方建設局長／入江洋樹
建設省河川環境課長／石川忠男
富山県知事／中沖 豊
- 特別講演 「清流と日本文化」 評論家／富山和子
- 研究発表 「清流と地域づくりに関する研究体系」
建設省土木研究所
環境部 河川環境研究室長／島谷幸宏
「黒部川の実態」 黒部工事事務所長／真下和彦
- 研究発表 「清流・伏流水の水質」
元富山県立大学短期大学部長／高倉盛安
「清流と地域づくり」 早稲田大学教授／宮口侗迪
「清流の生態学的、生活環境的効果」
東京水産大学講師／盛下 勇
「清流を生かしたまちづくり」 黒部市長／荻野幸和
「清流仁淀川が育んだ“紙の町・伊野町”」
伊野町長／山岡鐵彦
「清流の植生と動物」 信州大学農学部教授／吉田利男
- パネルディスカッション
コーディネーター：山崎丈夫／北陸地方建設局 河川部長
パネラー：石川忠男／建設省 河川環境課長
高橋幹夫／北海道代表 帯広市長
中島松子／黒部川水のフェスティバル実行委員
横山万蔵／東北代表 西川町長
その他研究発表者全員

荻野： 三次処理により、一度汚した水を元に戻すのに、どのくらいの努力がいるかということに挑戦している。

中島： 子供たちの意識に黒部川が清流No.1だということが残っていない。

真下： 清流は人間が川に何を求めるかによって、その要件が決まってくる。そういう意味でも清流と地域との結びつきを考えていく必要がある。

〔パートII 清流を生かした地域づくり〕

宮口： 物を作ることにより発展した社会と自然の共生が現代社会の大きなテーマである。ゆとりや各人の幸福感をもたせるような川作りを考えてほしい。

横山： 寒河江ダムにより西川町の所得が増えた。

盛下： 自然と共生する地域づくりを行っているところが榮えている。

山岡： 地場産業の和紙づくりを守りながら仁淀川の環境も保全していきたい。

高橋： 帯広では極めて自然に生活の一部として川を使っている。

島谷： 清流の現象論と活用論の研究が必要である。

石川： ワークショップを通して専門家も地域の皆さんも一緒に考えていき、また、研究を進めていくことが大事である。ワークショップを継続すべきである。

会場前のホールでは、黒部川と寒河江川の名水飲み比べコーナーや黒部川扇状地の湧水池など水にまつわる風物をパネルで紹介する水ガイドコーナーなどが設けられた。

清流の流れは未来へ

ディスカッションの最後に、次回の清流ワークショップの開催地は帯広市と決められ、荻野黒部市長から高橋帯広市長に引き継ぎが行われた。

今回のワークショップでの発表やパネルディスカッションで多くの研究の方向性が示された。これらをまとめ研究をさらに進めるため建設省河川環境課と土木研究所河川環境研究室、(財)パーフロンテ整備センターを中心にして研究体系の具体化が行われている。

今回の清流ワークショップの開催に際して、御支援、御協力をいただいた多くの方々に心より感謝申し上げますとともに、来年の帯広の清流ワークショップへ向けて、また、清流に関する研究の充実のために、研究の輪が全国に広がっていくことを望みたい。